

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A study of young Herbart in Bremen

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 精一, Sugiyama, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/938

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ブレーメン時代のヘルバルト

— 直観教授への軌跡 —

杉 山 精 一

1. カールへの最初の書簡（1800年1月7日）

「親愛なるカール。あなたにこうして最初の手紙を出すのを、私は楽しみにしていました。」⁽¹⁾

1800年1月7日。ヘルバルト（J. Fr. Herbart, 1776-1841）は、家庭教師をやめスイスを離れる旅の途中で、教え子カールへあてた最初の手紙をこう書き始めている。そこには厳しい強行軍で疲れながらも、ヘルバルトのカールに対する深い愛情を読みとることができる。この手紙以降、ヘルバルトはその後彼の職を引き継いだツィームセン、エッシェン、ゼーゲルケンなどと頻繁に連絡を取りながらカールの学習状況を確認し、様々な助言を送り続けている。

一見するとこの手紙は、カールへの深い愛情に満ちた手紙のように見える。けれども厳しい旅のさなかに書かれたこの手紙には、この時期彼が関心を持ち、カールに目を向けせようとしていた世界が凝縮されている。またそれは同時に、その後ブレーメンに住む友人シュミットのもとで続けた教授研究をも予感させている。

例を挙げてみよう。彼は旅の途中で立ち寄ったシュトラスブルクの劇場で、まず劇場のシャンデリアがろうそくではなく新しい化学薬品を使ったランプを使用していることに驚いている。またこのとき演じられたモリエールの作品とオペレッタに出演した俳優たちの美しさを「彫刻家たちが作った作品の

群れ」と表現し、カールにその感動を詳しく述べている。⁽²⁾

自然科学への関心と芸術作品に対する感動。彼が目を向けたこの二つの世界は、そのままカールへのメッセージとなっている。また化学への関心と、その教授との関連については、この書簡から2年後の1802年にはっきり確認することができる。ヘルバルトは『ペスタロッチーの直観のABCの理念』（以下『直観のABC』と略記）で、「教授の最初の配慮」すなわち感情を準備する教授の中心が数学であると述べた後、こう続けている。

「…数学的洞察にひょっとして近いものはただ化学だけであろう。……化学は、生徒に豊かな自己活動を提供する。」⁽³⁾

数学と化学は、その後直観教授の中心領域を形成する学問として位置づけられていくのである。手紙の内容は、こうした教授に関わる彼の理論的関心と符合する。次に彼は、旅の途中で出会った少年が描く絵の正確さに驚き、カールにそのことの意味を次のように語りかける。

「彼は自然を注意深く観察したのです、と父親はいいました。さあ私がそのことをあなたに何度もお願いしたことを覚えていますか。ずっと以前から、この法則はあらゆる美的な芸術の根本法則と見なされてきました。」⁽⁴⁾

注意深く見ることと美的な芸術への関心。この言葉は、そのまま『直観のABC』のモチーフと重なっている。彼は次のように述べている。

「この論文は、美的な直観については規定されていない……一般的な直観に限られる。」⁽⁵⁾

注意深く観察すること、すなわち「一般的直観」は、その後意図されていた「美的直観」に向かう最初の訓練であった。また次のような言葉も、この時期の彼の関心を象徴する言葉として興味深い。ヘルバルトは旅の途中で足止めされたとき、こう自分に言い聞かせて気持ちを切り替えようとしている。

「2, 3日ケストナー（の本）から少し積分を学べるぞ！」⁽⁶⁾

旅の途中、彼は数学者ケストナー（Kästner, 1719-1800）の本を持ち歩

き、それを読み続けている。旅のさなかに持ち続けた数学と化学への強い関心。美的な諸法則に到るために、注意深く自然を観察することの強調。これらは、彼自身が家庭教師時代から持ち続けていた哲学的関心であり、カールへのメッセージであると同時にその後『直観の ABC』に代表される教授研究へと引き継がれている。

カールへのこの手紙は、ヘルバルト自身が深めつつあった哲学研究とその後の教授理論との中間点に位置している。ではこの二つ、すなわち彼の哲学研究と教授への関心はどこにその接点を持ち、ブレーメン時代の教授研究へと引き継がれていったのだろうか。本論文ではこの原点がヘルバルト独自の自我論にあることを指摘し、ブレーメン時代の直観教授の意味について考察を試みたい。

2. 直観教授への軌跡

(1) 独自の自我論

イェナ大学在学期にヘルバルトが抱え込むことになったフィヒテの絶対的
自我克服の問題は、家庭教師としてスイスに滞在していた1798年に頂点を迎
えていた。その成果は、「最初に問題となる知識学の構想」で初めて具体的
な形を見せている。⁽⁷⁾

ヘルバルトはこの論文で、多様な自我活動の内実に自我を形成する本質的
存在を認め、それを「表象」「感情」という言葉を駆使して説明している。
この論文では、「絶対的自我」あるいは「絶対的なるもの」という言葉は全
く用いられていない。彼は結びつき離れる表象、様々な感情の対立と抑制の
中で成立する自我に注目し、それがどのようなメカニズムで形成されるかを
論じている。自我活動における感情や感覚はどのようにして生起し、意志や
意欲を持ったひとつの活動へと向かうのか。また連続性を持つ「継続的な反
省」⁽⁸⁾において自我はどのような構造を持っているのか。

ヘルバルトの経験した絶対的自我とは、他の何ものにも依存することのな

い知の形式を持っていた⁽⁹⁾。その第一原則が「自我の自己定立」である。それは自己を定立する自我が、何ものにも依存しない行為の主体であることを意味していた。この第一原則によって、自我に対するすべての存在は非我と見なされ、非我は自我に対して反定立される。これが第二原則である。けれども非我、すなわち自我に対峙する世界はあくまでも自我から独立して存在している。このとき、自我と非我とが相互に止揚しあいひとつにまとめ上げる第三原則が必要となる。これが「自我は自我のうちで可分的な自我に対して可分的な非我を反定立する」原則である。自我と非我は互いに独立して存在しながら、しかも一方ではお互いに制限し合う存在となる。

自分であるという自己意識と同時に自己を取り巻く世界の非我を認識し、この二つを自我の内ではひとつに定立する自我、すなわち経験的な自我の根底にあらゆる世界を包括する自我がフィヒテの絶対的自我であった。それはあらゆる知の体系を基礎づける根源的な行為の主体であり、フィヒテはこれによって学の体系を試みる。

けれども「自我は絶対的存在には依存しない」のであり⁽¹⁰⁾、「その活動性が自我の唯一の存在である⁽¹¹⁾」と考えていたヘルバルトは、経験的自我の根底で多様な非我を統一する絶対的自我の存在を認めることができなかった。

自我は「多種多様な非我に依拠⁽¹²⁾」し、ただ反省によって生まれる自我の思考は「空虚な思考⁽¹³⁾」である。なぜ自我は、ひとつに統一された自己意識を持ち得るのか。「空虚な思考」に陥ることなく、その多様性と単一性を可能にする自我とはどのようなメカニズムを持つのか。この問いへの回答を、ヘルバルトは次のように答えている。

「我々は……自我というものをひとつのものとして、そして多くのものとして同時に考えてみよう。我々はまず反省によって定立されたものを、その所産として与える限りで自我をひとつのものとするのであり、反省がとり扱う多様なものを自我に再び見いだそうと望む限り、自我を多くのものとする。単一性の中の多様性は量なのである。もし我々が多様なもの、

質料を断念するとすれば、そのときこの量は意味のない空虚な形式となるであろう。というのも、ただ反省によって生まれる所産は、空虚な思考である。⁽¹⁴⁾」

ここには後にヘルバルトが展開する表象心理学の原型がある。多様性と単一性を同時に満たし、さらに徹底したイデアリズムすなわち「空虚な思考」を回避するために、彼は自我を多様な実在を持つ実体として想定したのである。

(2) ブレーメン時代の直観教授の意味 ～ 経験と自我形成 ～

フィヒテが絶対的自我にあらゆる知の原点を求めたのに対して、ヘルバルトは多様な自我活動と、それを取り巻く対象との関係に新たな知の世界を求めていく。感覚世界において「自我に表象を与え、現実的な生起をもつ自我の結びつき」を、ヘルバルトは「経験を確認することである」と述べている。⁽¹⁵⁾

彼は確固たる意志を持つ自我形成のプロセスが、多様な現実と関わる継続的な自我活動を前提にすると考えていた。自我の持続的な内省の努力が、ある明確な感情を準備しひとつの意志を生み出すのである。それは多様に変化する現実との関係、すなわち経験によって左右される「偶然性」をもつものであった。ここに現実の時空間で連続性を持ち活動する自我は、対象との関係における「偶然性」という課題を引き受けることになる。⁽¹⁶⁾

ヘルバルトがこの「偶然性」という属性を自我形成の課題として引き受けたことは、彼と教授との関係を考える上できわめて重要な意味を持っている。なぜならこのような自我の属性を認めることは、対象との関係において成立する多様な自我活動を、どのように確保するかが新たな問題として浮上するからである。ここに自我を取り巻く対象一般への「注意深いまなざし」、すなわち自我の持続的な活動を確保するために、対象との最初の接点である「見る」ことの訓練（直観教授）が扱われることになる。

その理論的な道筋を準備したのが数学であった。彼のケストナー研究を端緒とする微分研究とは、自我の活動する無限の時空を数学によって確保することで、新たな知の世界を切り開こうとしていたことを意味している⁽¹⁷⁾。また一方で、数学による直観教授は、生徒の持続的な注意力を確保するための手段でもあった。

絶対的自我の立場を退けたヘルバルトは、この「注意深く」見るという人間の認識活動に基づく対象と自我活動との結びつきを、ペスタロッチー教授法の中に見いだした。カントの「物自体」あるいはシェリングの「知的直観」の立場を退けた彼が、事物の認識と言葉の直接的な結びつきを直観教授という方法で実現したペスタロッチーの教授法に向かったのも、このような展開を踏まえればごく自然の成り行きであった。

したがって1799年、ヘルバルトがペスタロッチーの授業を参観した報告には、子どもたちの「注意力」を目覚めさせ、維持し続けるペスタロッチーの授業に対する感動が述べられている。

「実は私がやってきてじっと見つめることで、……この試みがうまくいかないのではと不安でした。ところが子どもたちは、…生き生きとした活動を最後まで続けたのです…普遍的で持続力のある注意力は、私には謎でも何でもありませんでした。どの子どもも同時に口と手を動かし、彼らに怠惰と沈黙はなかったからです。」⁽¹⁸⁾

また1800年ブレーメン博物館で行われた講義では、哲学は「持続的な精神の緊張の中にある」と述べ、「哲学のために感情を整える方法」⁽¹⁹⁾が必要であると強調している。それは自我活動において多様に生起する感情を整える方法、すなわち数学教授によって支えられた直観教授であった。『直観のABC』においても、彼は繰り返し「注意深く見る」こと、持続的な自我活動を維持する「注意力」を確保することの重要性について繰り返し触れている。

「注意力の緊張とその維持は、あらゆる教育の最も重要な予備的問題である。」⁽²⁰⁾

「感情の母親とも言うべき敏速で無理のない注意力を、単に話し方の術によって、あるいはまた個人的な振る舞いによって獲得することができるのだろうか。」⁽²¹⁾

「教授の筋道とは……その指示によって注意力の散漫を避け、注意力を呼び起こし、持続させることを手に入れることである。」⁽²²⁾

3. ヘルバルトとペスタロッチーの接点 ～ フィッシャーとの出会いと交流～

ブレーメン時代のヘルバルトの教授研究、さらにヘルバルトとペスタロッチーとの関係を考えるとき、そこに重要な人物が介在していたことを指摘しておきたい。ヘルバルトにスイスでの家庭教師を薦めた J. R. フィッシャー (1772-1800) である。

教育思想史においてあまりにも有名な二人の足跡には、明らかにフィッシャーが重要な役割を演じている。ともすれば見逃しがちな彼の存在は、両者がたどった教育の歩み、すなわち二人の実践と理論に深いつながりを持っている。おそらく彼の存在がなければ、ヘルバルトとペスタロッチーの接点も、また彼らの歩みも違ったものになっていたはずである。だがこれだけ重要な人物でありながら、これまでヘルバルト研究において、彼の存在はほとんど取り上げられていない。⁽²³⁾ まずフィッシャーを基点に、ヘルバルトとの関係を簡単に整理してみよう。⁽²⁴⁾

年月日	できごと
1796年	
7月	フィッシャー、ヘルバルトが所属していたイエナ大学のアカデミックな学生サークル「自由人協会」のメンバーとなる。
9月	ヘルバルト、シェリング研究に没頭する。
10月	ヘルバルト、フィッシャーらと毎日集まり、シェリングについて議論する。

12月	ヘルバルト、フィヒテの絶対的自我と自然法に疑問を抱きシェリングに関する批判的論文を書く。
1797年	
2月	ヘルバルト、フィッシャーの紹介でベルンの貴族シュタイガー家の家庭教師を引き受ける。
3月25日	ヘルバルト、スイスへの旅の途中で、フィッシャーとともにザルツマンの教育施設を訪問する。
12月30日	フィッシャー、ヘルバルトを訪ね交流を深める。
1798年	
8月	ヘルバルト、数学研究を土台に独自の自我論を確信する。
10月28日	シュテック、フィッシャーにヘルバルトが微分の分析に取りかかったことを報告する
1799年	
秋頃	ヘルバルト、ブルクドルフのペスタロッチーの授業を参観する。
12月12日	フィッシャー、間近に迫ったヘルバルトの旅の準備に追われる。ペスタロッチーもヘルバルトがスイスを離れることを残念がっていると語る。

フィッシャーはヘルバルトを家庭教師としてスイスへ招いただけでなく、イエナ大学でヘルバルトとともにシェリング研究に取り組んだ仲間である。その後のスイスでの交流を通じて、フィッシャーはヘルバルトの独自の自我論についても当然知っていた。シェリング研究、さらにはフィヒテの自然法に対する批判も含め、彼らは哲学的に同じ道を歩んでいる。

ヘルバルトと教育を結びつけるいくつかの契機、すなわち家庭教師としての教育実践、スイスへの旅の途中で立ち寄った汎愛学舎の訪問、チューリッヒでのペスタロッチーとの出会い、さらにヘルバルトのペスタロッチーへの関心を決定づけたブルクドルフ訪問は、フィッシャーの存在なくしてはあり

得なかったはずである。

スイス出身の彼はシュネッペンタールの汎愛学舎に学び、文相シュタッパーの秘書であった。ヘルバルトが家庭教師としてスイスに滞在していた頃、彼は師範学校の設立によってスイス国民の教育を向上させる計画の実現に熱意を燃やしていた⁽²⁵⁾。ヘルバルトの身近な人物の中で、彼はヘルバルトと哲学的な問題意識を共有していただけでなく、教育に最も関心のある人物であったのである。

一方フィッシャーは、ペスタロッチーの実践にも大きな影響を与えている。ペスタロッチーが、ブルクドルフで教育の実践に取り組むきっかけを与え、また最初の助手であるクリュージを指導したのも彼である⁽²⁶⁾。

1801年10月、ペスタロッチーは『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』を出版する。フィッシャーの存在がペスタロッチーにとっていかに大きなものであったかは、この書の「第一信」にはっきりと書かれている。この「第一信」でペスタロッチーは、シュタンツでの疲れをフィッシャーの世話で癒すことができたこと、またフィッシャーが解釈した自分の教育原則を紹介し、その解釈を用いて自己の見解を詳しく述べている⁽²⁷⁾。

やがてフィッシャーはブルクドルフを去った直後、ヘルバルトの教育学的著作やペスタロッチーの活躍を見ることなく世を去る。ブレーメン時代に到るヘルバルトの教授への関心は、まさにこのフィッシャーを抜きに語ることはできない⁽²⁸⁾。

フィッシャーとヘルバルト。両者は、ともにある一点でつながっている。彼らはイエナ大学でフィヒテに学び、彼を中心に活動した学生のアカデミックなサークル「自由人協会」のメンバーであった。ヘルバルトがペスタロッチーと出会い、また教授に関心を抱いていくそのプロセスは、その人間関係においても「自由人協会」という共通の原点を持っている。

4. カールへの教授 ～ 持続的な自我活動の確保 ～

さて、家庭教師を辞めた後も頻繁にカールとの書簡のやりとりを続けたヘルバルトは、その後も様々な指示を与えている。⁽²⁹⁾ 彼が最も強調したのは、対象への「注意深い」観察と、それを受けとめる内的な感情の確保であった。その指示内容は、対象への注意深いまなざしをいかに確保し維持できるかに向けられていた。

「あなたが送ろうとした文章を、すぐに清書しないで下さい。すぐには書かないで、あなたが考えたことについて、まず最初によく考えてみて下さい。そしてその考えの中で、何が間違っているのか…何が正しいのか…よく吟味して下さい。またどれほど力強く…その考えがあなたの感情に影響を与えるのかについて気づいて下さい。⁽³⁰⁾」

「注意深いまなざし」と内省の努力を経て、何が正しく何が正しくないのかをじっくり吟味し、考えること。それが心の奥底に潜む不安定な感情にどのような影響を与えるのかに気づくこと。彼はカールへの教授で、「注意深い」思考の持続性——すなわち考え、感じ続けること——を最も重視していた。その実現のためには、カールの普段の勉強が中断されてもかまわないとまで述べている。⁽³¹⁾ また考え続けることの重要性を次のように繰り返し強調している。

「あなたの中で、もやもやしてはつきりしないことを追究しましょう。視線を変えてあちこち目を向けてみましょう。様々な結びつき、様々なイメージと事例の中で、そのことを考えましょう。歩いているときも立っているときも、座っているときも横になっているときも、部屋の中にいるときも外にいるときも考えましょう。⁽³²⁾」

こうした「注意深い」認識による思考の持続性が、カール自身の心情に訴える明確な概念を形成し、判断力を育む最初の教授であるとヘルバルトは考えていた。彼は次のようにカールに語りかけている。

「あなたは自分自身で判断することを学ばなければなりません。でも自分

の判断を教師や友人に報告し、それを彼らの意見と比較してみましょう。…何よりもまず私が望むことは、あなたが集めたすべてを…あなたの心と注意深く比較するということを忘れないでいただきたいということです。⁽³³⁾」

ヘルバルトはこの時期、絶対的な自我の定立ではなく、対象との関係によって生起する感情から道徳的な意志の成立を見ていた。この課題は、1798年の自我研究以降すでにその方向づけを与えられていた。すなわち数学研究による表象活動のメカニズムの解明と、対象への注意深い認識活動をひとつに方向づける教授活動である。

だがこのとき、次のような課題が残された。

ヘルバルトによれば、自我活動それ自体は道徳的な活動ではない。⁽³⁴⁾ 自我活動のメカニズムを明らかにすることで、概念の成立する理論的根拠を提示し、それによって道徳的意志の実現が可能であるとすれば、ではどのような対象世界を提示することによって、その認識が道徳的な世界へと導かれていくのかが問題となる。

それは絶対的自我による知の自律性ではなく、自ら確信した自我論を背景に「注意深く見る」教授、すなわち持続的な自我活動を確保しながら、新たな道徳的世界を切り開いていく試みであった。『直観のABC』において、彼は繰り返し「注意深く見る」ことの重要性について強調しながら、ひとつの明確な認識を手に入れることは意志であり、それは直観において生じると述べている。⁽³⁵⁾

ブレーメン時代以降、ヘルバルトはこの課題の克服に取り組んでいくことになる。それがどのような形で展開されていったのか。これについては、今後の課題としたい。

(註)

本論文中、引用及び参照したヘルバルトの論文は、すべて下記の全集による。またその末尾に全集の略号(K)、巻数、頁数を示す。

J. Fr. Herbart's Sämtliche Werke, hrsg. v. K. Kehrbach, O. Flügel
u. Th. Fritsch, 19Bde., Langensalza 1887-1912, 2 Neudruck Aalen 1989.

- (1) K. 16-129.
- (2) K. 16-130.
- (3) K. 16-165.
- (4) K. 1-130.
- (5) K. 1-157.
- (6) K. 16-130.
- (7) Erster problematischer Entwurf der Wissenschaftslehre. K. 1-96~110.
- (8) K. 1-99.
- (9) フィヒテの初期知識学については次の文献を参照。

隈元忠敬, 阿部典子, 藤澤賢一郎訳『フィヒテ全集 第4巻 初期知識学』哲書
房 1997年。

隈元忠敬『フィヒテ「全知識学の基礎」の研究』溪水社 1986年。

- (10) K. 1-23.
- (11) K. 1-23.
- (12) K. 1-97.
- (13) K. 1-98.
- (14) K. 1-96~98.
- (15) K. 1-101~102.
- (16) K. 1-96~97.
- (17) K. 1-98.
- (18) K. 1-140.
- (19) K. 1-126.
- (20) K. 1-159.
- (21) K. 1-164.
- (22) K. 1-166.
- (23) 他の追隨を許さぬヘルバルトの詳細な伝記を残したアスムスにおいても、フィッ
シャーが二人に与えた影響とその理論的な接点については不十分なまま残されて
いる。

Asmus, W.: Johann Friedrich Herbart-Eine pädagogische Biographie.
I. Teil: Der Denker (1776-1809), 1968. Heidelberg.

- (24) K. 16-29ff.
- (25) 長尾十三二『ペスタロッチー「ゲルトルート」入門』明治図書 1977年, 68頁。
- (26) 前掲書, 70~71頁。
- (27) 長田新編『ペスタロッチー全集 第8巻』平凡社 1962年, 38~48頁。

- (28) フィッシャーともうひとり、ヘルバルトとペスタロッチャーを結ぶ人物がいる。ツェンダー (1772-1807) である。ペスタロッチャーがブルクドルフに行く直前、温泉地グルニーゲルで彼の静養を助けたツェンダーは、ヘルバルトがスイスに行くまでカールの家庭教師であった人物である。Vgl. K. 16-49.
- (29) 1800年3月1日の書簡では、次のような指示をカールに与えている。
- 「私がお望みしたいことは、毎日過ぎ去ってゆく日々の中で、何か興味あることを聞いたり、学んだり、考えたりしなかったかどうかを毎晩よく考えてほしいということなのです。さらにお望みしたいのは、その週の内であなたにとって何が最も興味あることだったのかを、その週の終わりの土曜日か日曜日に回想してほしいのです。もしあなた自身で、自らの努力によって価値ある何かを実際に見出したなら…それを私あての手紙と一緒に同封してもらえないでしょうか。」
- K. 16-135.
- (30) K. 16-141.
- (31) K. 16-142.
- (32) K. 16-141.
- (33) K. 16-186.
- (34) K. 1-263.
- (35) K. 1-161.